

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

北米やイギリスなど、欧州北部の人々のメンタリティからも日本人は学ぶべきだと思います。彼らは基本的に「他人叩き」には興味がありません。

その一番大きな理由は「個人主義社会」であるからでしょう。

人と自分との違いを明確にしており、相手に嫉妬することがないため「他人叩き」をする必要がないのです。倫理や根本的なモノの考え方である「イデオロギー」などの原理原則で緩やかに繋がった「個人同士」が社会活動を営んでいる。だからこそ肩書や年齢、性別、地縁、血縁などの違いに対しては、非常に緩やかでオープンです。

① 「個人」を大切にする社会なので「私はこういう意見です」とはっきりと意思を表明し、相手と能動的にコミュニケーションをとっていかないと、円滑な人間関係は作れません。それはそもそも、人間はこの世に生まれ落ちた時から個別の主体であり、たとえ親子であっても個々の人間は別の存在である——という考え方が社会に根差しているからでしょう。

自分と他人は違って当たり前。日本のように誰もが同じであるという前提がないのですから、個人個人の考え方が違っていても当たり前。趣味嗜好も違うに決まっているというのが、彼らの基本にある考え方の一つです。

② 「各々が個別の主体である」という考え方には、生物学的な意味合いもありますし、宗教的な意味もあります。宗教的な意味とは、神が個々の人間をお作りになったのだから、そもそも同じ人は存在しない——という考え方です。

欧州北部では戦後になって外国人の数が飛躍的に増えています。

今やその数は人口の約12%にも及びます。

③ 日本は全体の2%にすら届いていません。ロンドンの場合はなんと人口の3分の1以上が外国生まれです。北米の場合はそもそも最初から移民国ですので、様々な宗教や文化背景を持った人が生まれたときから身近にいます。

多様な人種が共存する社会であるため、最初から「お互いが違う人間である」という彼らの個人主義的な考え方により拍車がかかっているのです。

個人主義的な思考が社会の根本にあるため、欧州北部や北米では、幼少時から学校などで「自分の意見を主張して他人を説得する方法」を熱心に学びます。

④ イギリスの場合。幼稚園の頃から「自分は〇〇だと思います」と、大勢の前で意見を述べる授業がありますし、試

験や宿題は自分の考えを表明する論述式ばかりです。

先生はその論述の答えが正しいか否かをみる以前に、論述の流れや説得方法が妥当かどうかを評価します。論理の進め方、論拠の付け方、バランスの取れた見解かどうかを主に判断するわけです。

歴史の授業では日本のように「史実を丸暗記」するようなことはまずありません。「十字軍の遠征により欧州大陸に生じた文化的変異」といったことを調べ、論文にしたり、他の生徒の前で意見を発表したりします。知識や記憶の正確さを競うのではなく「知識を使って他人を説得するのがうまかったかどうか」を重要視しているのです。

もちろん大学などの入学試験でも論述力がメインです。

私立中学の入試に出てくる問題が「19世紀の中国における宗教紛争の政治的な意味を論ぜよ」だったりするので驚きです。

なぜこうした論述や説得の訓練を延々とやるのか。他人は自分とは最初から違う意見を持っているのが当たり前なので、相手を説得し、妥協点を見出さなければすべてにおいて進展はない——という社会的思考がその背景にあるのです。相手を説得できなければ物事を動かすことはできません。説得できない人は知的に劣る上に力がないという評価になってしまっています。

⑤ 「俺はこうだ」「君はどう思うのか」「それはツマラナイ」などと、自分の意見を主張し、ドンドン発言できる人でなければ、社会生活において「こいつ面白いな」「見どころのある奴だ」などと相手に興味を持ってすらもらえないわけです。

だからこそ幼少時から「私の意見はこうです」と表現する技術を徹底的に訓練するのです。

個人主義社会には、日本人が学ぶべき「気楽な人間関係」があります。

彼らは自分と相手が同じであることや、ある集団の人々が同じように振る舞うことを期待することはまずありません。それよりも各々の自由な発想や仕事の「結果」が重視されます。

⑥ 日本のように「間」や「空気」を考えると、相手を怒らせないように発言に気を付けるなどといった余計な気遣いは無用な社会なのです。

何より自分の意見が大事ですから、日本のような古くからの因習や慣習への異常なまでの尊敬はみられない。周りに流されず、個人が自分の信念にそって活動することこそが重要とされます。

こうした前提が存在するからこそ「自分とは元々違う」個人である他人を叩いてもどうしようもないと考えられているのです。ね。彼らにとっては相手を叩くことよりも、論拠を示して「説得」することが重要であるため、日本人のようにネチネチした「他

人叩き」には興味がないのです。

個人の違いが確立しているわけですから、相手と自分を比べて嫉妬心を燃やし、「他人叩き」をする必要なんてないのです。

④、人間関係もおのずと穏やかで気楽になっているのです。

個別主義社会の考え方とは真逆で、日本人が他人を叩いてしまうのは、その背景に「自分と相手は同じに違いない」という考え方があるためです。

自分と相手は同じはずだからこそ、相手も自分と同じような社会的倫理を受け入れるはずだし、同じように行動すべきであり、同じような価値観を持つべきだ、だから自分と違うことをするのは許さない！となってしまふのです。

こうした考え方は日本が集団主義文化圏に属するからこそのものでしょう。ほかに同じ文化圏に所属するのは、東アジアや東南アジアの国々、南アジア、中東、ロシアなどです。アフリカの一部も所属していると感ずることがあります。

集団主義の社会では人々の関係性が親密であり、その行動は、因習や慣習、所属集団のルールによって強烈に縛られています。人間関係が主体であらゆる物事が動くので、相手を怒らせないようにすることが何より大事。だから人間関係はネットリしていても粘着質。気を遣いすぎて変な間を取ったり、本当はそう思っているのに「そんなことないよ」などと曖昧な表現で返事をしてしまうというわけです。誰もが相手の感情を読み取ろうと必死な社会なのです。

日本の国語の教科書に「その時の〇〇君の気持ちを答えなさい」といった演習問題が頻繁に掲載される理由がわかるといふものです。

自分の意見を述べさせる個人主義社会の教育とは真逆ですね。

集団主義社会で育った人々が、個人主義の世界に放り出されると何が起こるのか。それはコミュニケーションの文化的衝突です。

日本人のような集団主義の人々は、一生懸命相手様のご機嫌を窺い、心を読み取り、控えめに発言しようとしています。ところが集団主義の人々のそういう心遣いは、個人主義の相手には通じません。

彼らは「あいづらは遠回しに言いすぎるから、結局何を言っているのかわかんないし、何を考えてるかもわかんない」と文句を言い、自分の意見をありったけ主張して、集団主義の世界の人々を言いくるめてしまいます。

個人主義ならではの攻撃的ともとれるコミュニケーションスタイルにどうしても慣れない集団主義の人々は「また言いくるめられた……」と裏でこっそりと涙を流します。

「俺はこんなにアイツらに気を遣っているのにアイツらはまったく理解してくれない。酷い奴らだ！」と飲み屋で延々と愚痴をこぼすのです。

実はこれ、日本人ビジネスパーソンと、イギリスなど、個人主義社会の文化からやってくるビジネスパーソンの間で実際によく起こることです。私は右記のような衝突を何度も目撃しています。

コミュニケーションスタイルの違いがお互いの人間不信にまで発展してしまい、ビジネスに深刻な影響を及ぼしてしまう。個人主義と全体主義の共存は実は案外根が深い問題なのです。

日本では最近グローバル人材とはなんぞやみたいなことが騒がれていますが、外国で商売をするとなると、個人主義の世界の人々とのやり取りが必ず絡んできます。

個人主義世界の人々は相対的に人数が多く、積極的な性格でとても「強い」ので、世界の様々なルールを取り仕切っていたり、利権を握っているからです。

日本人がグローバル人材について語るのであれば英語と並行して、⑤個人主義の考え方を持つ人達とやり合えるコミュニケーション能力をこそ磨くべきでしょう。

「相手を傷つけない話し方」なんて練習していても彼らと対等にやり合えるようには決してなりません。

(谷本真由美「不寛容社会」による)

注 *1 メンタリティ……心理的傾向

*2 イデオロギー……物事に対する考え方やその傾向

問1 ~~~~~ A「能動的に」、B「根差している」、C「拍車がかかっている」の意味として、最も適当なものをそれぞれ次の中から選びなさい。

A 「能動的に」

ア 自分から進んで
エ 協力し合って

イ 可能な限りで
オ 慎重になつて

ウ 効率良く動いて

B 「根差している」

ア 役立っている
エ 共有している

イ 拡散している
オ 定着している

ウ 隠れている

C 「拍車がかかっている」

ア 進行が一段と速くなる
エ 心を奪われ夢中になる

イ 興奮し騒然となる
オ さらに一生懸命になる

ウ 真実味を帯びる

問2

㊦から㊩

はいけません。

に入る最も適当な語をそれぞれ次の中から選びなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いて

ア 例えば イ かたや ウ しかし エ そもそも オ だからこそ

問3 ——— ①「非常に緩やかでオープンです」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 欧米社会では、自分の属する社会に個々人が誇りを持っているため、種々の違いを隠す必要を感じていないということ。

イ 欧米社会では、人間はそれぞれ個別の存在であると考えするため、他者と自分の違いに対してこだわらないということ。

ウ 欧米社会では、人間は生まれながらにして他者とは違う存在であるため、肩書や年齢なども遠慮なく明かせるということ。

エ 欧米社会では、自分を一番大切にするため他者に対する興味が薄く、他者との違いに対しておおらかな人が多いということ。

オ 欧米社会では、国境を越えるような移動を規制しておらず、個人の自由が当たり前の権利として存在しているということ。

問4 ——— ②「気楽な人間関係」とありますが、これと対照的な関係を表現した部分を探し、「〃な人間関係」に続く形で、本文中から十五字以内でぬき出しなさい。

問5

——— ③「『問』や『空気』を考える」とはどうすることですか。説明として最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 人間関係を円滑に進めるために、相手との距離感を保ったり、その場の雰囲気をつくみとったりすること。

イ 自分が利益を得るために、相手との会話の中で好機を探りながら心理的な駆け引きを行っていくこと。

ウ 全体の調和を保つため、古くからの因習や慣習を重んじつつ、少数派の新しい意見も織り交ぜていくこと。

エ 互いに協調し高め合うために、個人の生活を尊重しつつも、世間の傾向を意識しながら生活すること。

オ 積極的な性格である個人主義の人々と対等に渡り合うため、本音と建て前を使い分けて発言すること。

問6 ——— ④「日本人のようにネチネチした『他人叩き』には興味がない」とありますが、日本人はなぜ「他人叩き」をするのですか。説明として最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 多数派の意見に従ってしまう日本人の感覚に嫌悪感を持ち、少数派の意見を尊重する社会をうらやんで嫉妬心を持つから。
イ 集団主義社会では場の雰囲気を読み取って自分の言動に反映させるが、個人主義社会の人々にはそれが通じず苛立つから。
ウ 日本人は言葉を介さず相手の心情を感じ取る力を持つが、その力のない相手には直接的に言葉で非難するしかないから。
エ 集団で共有されている因習や慣習を重視するあまり、個人の信念に基づいて行動する人物が気に食わなくて、許せないから。
オ 自分の意見の表明に慣れていない日本人は、対立する意見を排除する中で、その意見を言った個人も敵視してしまうから。

問7 ——— ⑤「個人主義の考え方を持つ人達とやり合えるコミュニケーション能力」とはどのような能力ですか。三十字以内で説明しなさい。

二 働いている恵美は、少し認知症がある母の寧子の世話をヘルパーの依田に任せているが、その介護事務所に良くないヘルパーがいるという評判があることを気にしている。昨日寧子は珊瑚の指輪がなくなったと騒ぎ、依田が盗んだに違いないと言い張ったが、冷蔵庫から出てきた。以下はそれに続く場面である。読んで後の問いに答えなさい。

光サイフォンに明かりが点いた。渡の大きな手がサイフォンにフィルターをセットする。湯が上がりきると、彼は使い込まれた木べらで丁寧に攪拌した。コーヒーを淹れる渡の仕草は正面から見るとますます優雅で、恵美は時間が緩やかに流れるのを感じた。自分の家とこの店が、車で十五分程度しか離れていないことが信じられない。あの家を取りまく時間は早い。父親が亡くなり、母親が倒れて、それからあの家の時間はずっと加速し続けている。

昨晚の指輪騒動のあと、寧子は恵美を自分の妹の名で呼んだ。違うよ、恵美だよ、とすかさず訂正すると、急に虚ろな目つきになって、めぐ……み？ と、娘の名を、まるで見知らぬ国の単語のように発音した。数秒後にはいつもの調子に戻ったが、加速する時間に弾き飛ばされ、恵美は一瞬、自分が丸ごと消滅しかけたような気がした。

「お待たせしました」

目の前にコーヒーを置かれ、恵美は我に返った。今日は、青紫のプラムの絵が中心に入ったカップだった。一口飲み、二口飲んで、まだ帰りたいと思う。クロワッサンのサンドウィッチを追加注文すると、渡は困ったように眉根を寄せた。

「あ、売り切れちゃいました？」

「いや、パンはまだあるんだけど……」

どうも今日の渡はおかしい。恵美は内心で首を傾げた。ゴルフ雑誌を読んでいた男が立ち上がり、ごちそうさん、と小銭をテーブルに置いて去っていく。渡はカウンターから出ると、男の使っていたコーヒーカップや灰皿を片づけ始めた。そして、恵美と目を合わせないまま、

「クロワッサンとピザトースト、やっぱりやめようかなって、今、迷ってるんだよね」

「どうしてですか？」

「珈琲店のくせに、食べもののメニューばかりがどんどん増えていて、なんか節操がないって。おまえ、パン屋かよって」

「そんなこと言われたんですか？ お客さんから？」

男が置いていった小銭をレジに入れ、渡はカップと灰皿を流しで洗った。カウンターの内部は客席より若干床が低く、背中を丸

めて作業をする渡のつむじは、ちょうど恵美の目の高さにあった。

「飲食店の口コミを読んだり書き込んだりできるサイトがあるんだけど、北原さん、知ってる？」

もちろん知っていた。同級生とたまに会う際には必ず利用している。料理の味からポリウム、内装、店員の接客態度まで、店の公式サイトでははっきり分からないようなことがそこには書き込まれている。大勢から星を集めているところを選べば、とりあえず大失敗はしない。

「そこに、そんなコメントがあったんですか？」

「うん。昨日たまたまうちの店のページを見つけて、覗いてみたら、そういう書き込みがあって」

たまたまではない。恵美は閃くように思う。もしかしたらこの人は、自分の店についての書き込みがないか、毎日チェックしているのではないか。真っ暗な部屋、渡が真剣な面持ちでパソコンを覗き込んでいる姿が頭に浮かぶ。そこに真実が、自分を導いてくれるものがあるような気がして、彼は必死に画面をスクロールする。

「ほかに、店長が馴れ馴れしくて鬱陶しい、せつかくつろげそうな雰囲気のお店なのに残念だ、とか。あはは、一理あるよね」^②

「そんな——」

口コミなんか気にすることないですよ、と言いたかった。人それぞれですから、と。正反対の意見の人もきっといますよ、と。また、渡自身もそう言われたがっているような気がした。しかし、どうしても口を開くことができず、恵美は目を伏せてコーヒースタマを啜った。ほろ苦さが舌に残った。

次第に生ぬるくなる風に身震いする。空を仰げば、灰色の雲が猛スピードで流れていた。恵美は荷台にトレイを戻し、運転席に乗り込んだ。今夏二度目の台風上陸が迫っていた。雨が降り始める前に配達を終えたかった。

雨に備えてか、車の交通量が多い。頭の中に地図を浮かべ、近道を検索する。生まれ育った街だ。土地勘はある。恵美は裏道を駆使し、残りの三軒を大急ぎで回った。本日最後の配達先は、森林公園の近くに建つ産婦人科だった。このあたりでは一番人気の産院らしい。ここで分娩するにはかなり早くから予約を入れなければならないのだと、前にパートの主婦から聞いたことがあった。

産院は、消毒液と砂糖菓子を混ぜたような匂いがする。遠く、かすかに泣き声が聞こえた。調理師にトレイを引き渡し、と、ポケットの中で携帯電話が震えた。出ようかどうか迷ったが、あとはサインをもらうだけだと無視を決め込む。来週ぶんの注文につ

いて軽く打ち合わせたのち、外に出た。駐車場に戻る道すがら、携帯電話がふたたび着信を知らせた。

発信者を確認すると、依田、と表示されていた。緊急時に備えて連絡先は交換してあったが、かかってくるのは初めてだ。暑さが一気に遠のいた。

「もしもし？」

「お仕事中に申し訳ありません。ヘルパーの依田です」

「いえ、大丈夫です。あの、母になにかありましたか？」

「実はですね、寧子さん、買いものに行く途中にちょっと怪我をされました」

「怪我？」

脳の奥のほうでなにかが蠢く気配がした。まだそれを直視してはいけない。小さく息を吸い、恵美は懸命に平静さを保つ。大きな段ボール箱を抱えた医療品の卸業者が、恵美の横を迷惑そうな顔で通り過ぎていく。自分が道の真ん中に立ち尽くしていたことに気づき、恵美は慌てて車に戻った。

「道の側溝に足を取られて、転んでしまわれたんです。歩き慣れた道だからと、私も完全に油断していました。申し訳ありません」

「あの、それで怪我の具合は？」

「すねと膝に擦り傷を負われました。寧子さんが病院に行きたいと仰いましたので、外科にお連れして、保湿剤を処方されました。お医者さんの話では傷は浅く、一週間もすれば治るだろうとのこと。事業所とケアマネジャーのほうには、私のほうから先ほど報告致しました」

「そう、ですか。お手数をおかけしました」

恵美は運転席にもたれた。そのまま腕だけを伸ばす姿勢で鍵を回し、エンジンをかける。エアコンの送風口からは埃臭い空気が、スピーカーからはラジオの音声が、同時に流れてきた。ふいに依田が言葉を発するも、それらのせいで聞き取れず、恵美は風力と音量のつまみを左方向に捻った。

「すみません、もう一回言ってもええですか？」

「いえ、あの、今回の件は私の不注意が招いたことではあるんですが……」

依田の喋り方は煮え切らなかった。恵美は急かしたい気持ちを頬の裏側で噛み潰し、続きを待った。

「病院から帰ってきてからというもの、寧子さん、私と口を利いてくだらないんです。溝に足を滑らせたとき、私、とっさに手を伸ばしたんですけど間に合わなくて、そうしたら寧子さん、どうしてなのか私が突き落としたように思い込んでしまわれて……。でも、そんなことは決してないんです」

背を丸め、杖をついてゆっくり歩く寧子の背を、依田の手が強く突く。瘦せた老婆の身体はたやすく傾き、片方の足が溝に落ちる。その拍子にすねが溝の縁に擦れ、皮膚に赤い血が滲んだ。あるときから急に怪我が増えたという山崎の母の話が、春ひなたサービスに所属しているらしいホームヘルパーの悪評が、頭の中に渦巻く。しかし、誰の顔もよく見えないのはなぜだろう。大粒の水滴がぼたりと音を立て、フロントガラスに落ちた。降ってきたと思う間もなく、車は雨に取り囲まれた。

「本当に、私はなにもしてなくて、でも、私の言うことなんて、きっと信じられないですよね」

「依田さん」

「私はただのホームヘルパーで、寧子さんは恵美さんのお母さまですから、当然です」

「依田さん、私は」

「覚悟はできています。短いあいだでしたが、大変お世話になりました」

恵美が応えられずにいると、もう一度謝罪の言葉が繰り返され、そして電話は切れた。不通音が一定のリズムで鼓膜を打つ。恵美は力なく携帯電話を閉じ、窓の外に目を遣った。森林公園の木々が傾くように揺れている。雨の飛沫であたりは白く煙っていた。視界の端でビニール袋が大きく翻り、勢いよく宙を舞った。

部屋の明かりも点けずにパソコンを起ち上げ、モニターの光に顔を浸すような姿勢でキーボードを打つ。ホームヘルパー、怪我、交代。たった三語を入力しただけで、数万もののページが検索結果に現れた。恵美は息を吞んでそれらを読み進めていく。介護サービスにおけるトラブルは枚挙に遑がなかった。ホームヘルパーに家の中のものを壊されたり、金銭を盗まれたり、明らかに犯罪だという件も多い。

寧子は今、自分の部屋で眠っている。恵美が帰ってきたことにも気づいていないだろう。寧子の左足のすねと右足の膝には、真っ白なガーゼが貼られていた。血はもう止まった様子で、本当に軽傷だったらしい。昔から、寧子は医者に全幅の信頼を置いていた。恵美や佐知子が微熱でも出せば、すぐさま病院に連れて行った。

一際強い風が窓を叩く。台風は威力を増していた。痙攣するように窓ガラスは震え、雨の屋根を打つ音はやかましい。雨戸を閉

めなくてはならないながらも、恵美はモニターから目が離せなかった。インターネットを巡るうちに、いつしかホームヘルパーが集う匿名掲示板に辿り着いていた。規則だからと出してもらったお茶を断ったら、次の日から利用者が口を利いてくれなくなった、と落ち込む人がいて、リハビリを嫌がる利用者から虐待だと罵られた、と腹を立てている人がいる。まあ認知症患者は被害妄想が強いからね、となにかを諦めたような書き込みが、恵美の網膜に刺さった。

ああ、と呻き声が漏れた。気づいてはいた。分かっていたのだ。長らく自分の進むべき道を照らし続けた光は、急速に、確実に、衰えつつある。だからその代わりに、インターネット上に散らばる星をかき集めた。今の恵美が頼れるのはその星明かりだけだった。

ポータルサイトのトップページに戻った。春ひなたサービス、と検索バーに打ち込み、評判、噂、口コミといった単語で結果を絞り込む。しかし、所詮は地方にある小さな訪問介護事業所だ。求めているような情報は出てこない。恵美はついに依田の姓名を入力した。力を込めてエンターキーを押す。ヒットした、と思ったら、それは同姓同名の県議会議員だった。

③誰か、依田さんに五つ星をつけてよ。

自分のほかにも依田を認めている人がいれば、安心して続行を望める。依田を信じることができる。お願い、どうか私に星をください、と恵美は祈るように検索を続けた。そのうちに、誰に誰を認めてもらいたいのか、よく分からなくなっていく。肯定されたい、褒め言葉しかいらぬ。無数の声がこだまする。私の言うことなんて信じられませんか、との弱々しい依田の呟きが、たまたま自分の店の口コミを見つけてしまったという渡の言葉が、その中に溶けているのを感じた。

恵美は両肘を机につき、頭を両手で抱えて項垂れた。無性に悲しかった。涙がこぼれないよう、下唇を噛みしめる。と、指先に柔らかいものが触れ、顔を起こした。

ゆっくりとそれを引き抜き、手のひらに載せる。シフォン生地で作られたワインレッドの花と、小さなパール。数ヶ月前、暑くなり始めたところに購入したものだ。本当は、とても気に入っていた。五分と前から買いたかったのは、これに一目惚れしたからだ。誰かに趣味が悪いと笑われないか不安だったが、実際は、着道楽の寧子すら気がつかず、見つけてくれたのは、一人だけ――。

寧子と会うと元気が出るのだとその人は言い、寧子がボタンを留められれば、それだけで大喜びした。あの弾けんばかりの笑顔が嘘だったとは、とても思えない。寧子が口ずさんでいた歌のタイトルまでが残されたメモ、恵美が昼飯時に立ち寄れば、おかえりなさいと出迎えてくれた。

一階で電話が鳴った。ケアマネージャーだった。本日の件ですが、と落ち着き払った口調で切り出した彼女は、まず初めに怪我に至った状況について確認し、次に診療代のことを話した。恵美はそれを焦れたい気持ちで聞いた。

「それから、ヘルパーの依田さんのことなんですが」

「はい」

「依田さんの報告によると、寧子さんのご信頼をだいぶん損ねてしまったそうで……。どうですかね、今後も担当させていただくというのは、やはり難しいでしょうか？」

「あの、私が帰ったときには母は眠っていて、まだ話せていないんですけど」

手の上の花と珠を見つめた。随分長いあいだ、自分を照らしてくれる光ばかり求めていた。しかし、暗闇を進む方法はほかにもある。

「母も今は混乱しているかもしれませんが、本当によくしてくれと、依田さんのことは非常に信頼していました。もちろん私も同じです。だから、今回のことで交代というのは、考えていません」

そうですか、と応えたケアマネージャーの声は、かかってくるよりもずっと高く、活き活きとしていた。通話を終え、恵美はパソコンをシャットダウンした。⑤ 胸に温かいものが広がっていた。自分の手で明かりを灯せたような手応えがあった。

縁側に出て、一階の雨戸を閉めた。軒はあるものの、瞬く間にずぶ濡れになった。Tシャツが身体に貼りつく。だが、不快ではなかった。もう一方の雨戸を引き出しながら、ほかの人は知らないけれど、私はあなたの店が好きだと、落ち着くのだと、台風が苦手なあの人に伝えようと思った。

(奥田亜希子『五つ星をつけてよ』による)

問1 ~~~~~ A「節操がない」、B「煮え切らなかった」、C「無性に」の本文中で使われている意味として、最も適当なものをそれぞれ次の中から選びなさい。

A 「節操がない」

ア 遠慮がない

イ 際限がない

ウ 理解がない

エ 信用がない

オ 信念がない

B 「煮え切らなかった」

ア だらしかなかった

イ 機嫌が悪そうだった

ウ 心残りを感じていた

エ はっきりしなかった

オ 反省がなかった

C 「無性に」

ア ただ無理矢理に

イ 何も考えられずに

ウ 何とも不自然なことに

エ ひたすら懸命に

オ 理由もなくやたらに

問2 ~~~~~ ①「加速する時間に弾き飛ばされ、恵美は一瞬、自分が丸ごと消滅しかけたような気がした」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 認知症の症状が母親にはっきりと出てきている状況を直視することができず、現在の状況から逃げたいと無意識に考えてしまうということ。

イ 仕事に介護にと忙しい生活を送っているため、なかなか自分のことを考える余裕がなく、本来の自分を見失いそうになっているということ。

ウ 次々と起きる家族の変化についていけず、余裕をなくしている中、母に忘れられたことをきっかけに自分自身の存在を見失いかけたということ。

エ 周囲の状況が様々な変化を遂げていく中、穏やかだった過去を振り返ることではか落ち着きを得られず、生きる意味がわからないうこと。

オ 父の死や母が認知症になっている現実をたった一人で受け止めなければならず、その重圧に押しつぶされそうになっているということ。

問3 ―― ②「あはは、一理あるよね」とありますが、こう言ったときの渡の心情を説明したものとして、最も適当なものを選びなさい。

ア 自分の店に対する否定的な意見をサイトで目にして、動揺してしまっているのをなんとか隠そうと思っている。
イ 自分の店に対する建設的な批判を見つけて、これから店をどうしていけばいいか明確になったと喜んでいる。
ウ 自分の店に対する評価をサイト上で見つけたが、あまりに一方的な言いがかりであったため憤りを覚えている。
エ 自分の店に対して消極的な意見をもっている客の存在を知って、落ち込みながらも心の中では納得している。
オ 自分の店に対してけなすようなコメントがあることは知っているが、的外れな指摘なのであきれかえっている。

問4 ―― ③「誰か、依田さんに五つ星をつけてよ」とありますが、恵美がこのように願っている理由を、七十字以内で説明しなさい。

問5 ―― ④「私の言うことなんて信じられませんか、との弱々しい依田の呟きが、たまたま自分の店の口コミを見つけてしまったという渡の言葉が、その中に溶けているのを感じた」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 依田は自分に自信が持てないことから、歯切れの悪い電話を恵美のもとにしてきたが、それは渡が過去に抱えていた不安と同種のものであるということ。

イ 依田は今回の件に関して反省を示していたものの、偶然起こった事故だと考えており、偶然サイトを見たという渡と同様に問題から逃げていくということ。

ウ 依田が煮え切らない話し方をしていたのは、周囲からの評判を気にしてのことであり、それは口コミを気にする渡が抱える不安と同じ質のものであるということ。

エ 依田が今回の失敗を機に改善をしようと望んでも、信用のなさから諦めないといけない現実に絶望していた姿は、渡の悩みよりも重いものだということ。

オ 依田が弱々しい声で怪我のことを報告してきたのは、ネットで自分の悪評を知ったからであり、その姿は渡が落胆しているのと同じであったということ。

問6 ―― ⑤「胸に温かいものが広がっていた」とありますが、このときの恵美の心情の説明として、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア こじれていた人間関係の問題が予想外にたやすく解消したことによって、舞い上がるほどうれしくなるような気持ち。

イ 音声のみで自分の考えを伝えられるか不安だったが、自分の言葉を良心的に解釈してくれたことに感謝するような気持ち。

ウ 電話の相手の不機嫌そうな語り口に不安になったが、話し合いの末に機嫌を直してくれたことに安心するような気持ち。

エ 自らの判断で選んだ言葉で他者を元気づけることができたという手応えを感じて、自分自身も救われたような気持ち。

オ 取るに足りない自分でも励ましてくれる誰かがいてくれるということに気づき、日常生活に充実感を覚えるような気持ち。

問7 本文の表現の特徴を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 恵美が悩んでいる姿を際立たせるために、他の登場人物をはっきりとした性格の人物として描き、読者が恵美に同情するよう仕向けている。

イ 擬人法を使いながら風景や周囲の状況を描くことによって、恵美が感じている緊迫感を読者に伝え、疾走感のある展開を演出している。

ウ 登場人物の細かい動作を丁寧に描く一方で、恵美の心中をそのまま語るような描写を交え、読者が恵美に感情移入することを可能にしている。

エ 物語の途中に回想部分を挟み込むことによって、なんとか冷静な判断をしようと必死な恵美の姿を描き、親のことで悩む切迫感を伝えている。

オ 仮想空間を軽視するような発言をしつつも、現実世界で問題が起きれば仮想空間に心のよりどころを求める現代人の空虚な姿が描かれている。

三 次の各問いに答えなさい。

問1 次の空欄に当てはまる言葉をそれぞれ後の記号から選びなさい。

- ① 木に をつぐ (前後のつじつまが合わないこと)
② とりつく もない (頼みにしてすがるところがなく、どうしようもないこと)
③ 立て板に (弁舌がなめらかで、巧みであること)
④ 渡りに (ちょうど都合のよいこと)
⑤ 上の (精神が集中しない状態)

ア 島 イ 河 ウ 水 エ 草 オ 空 カ 木 キ 船 ク 石 ケ 竹

問2 次の詩は、永井宏^{ながいひろし}の死を悲しんで作られたものです。~~~~~「十代半ばでほとんど消えてしまうのは／どうしてだろう？」の理由を、「羽」の指す内容を明らかにした上で説明しなさい。

羽

背中に羽を生やしたような人がいるね
ある人が教えてくれた
確かにそうかもしれない
独自の価値観を持ち
常に高く舞い上がろうとする人だ
そんな人は
ビルから飛び降りても
落ちたりしない

翼^{つばさ}を広げ

風に乗り

そのまま遙^{はる}く遠くへ飛んで行き

また新しい世界を手に入れてしまう

よく見ると

幼い子には

たいていツヤツヤした羽が生えている

でも十代半ばでほとんど消えてしまうのは

どうしてだろう？

今も

飛び立てる場所を持つ大人には

羽が残っている

もう年季が入っているから

上手に

自由に

空を舞い

にこにこと楽しそうだ

手を振ったりしている

いつも彼らを見上げていたが

小さな足場を固めると

僕^{ぼく}にも

羽が生えてきた

(西尾勝彦「羽」)

四

次の各文の~~~~部を漢字に改めなさい。ただし、必要なものには送り仮名をつけること。

- ① モケイ飛行機を作る。
- ② 悪者をセイバイする。
- ③ 紙面のサツシンを図る。
- ④ 庭にアジサイをイシヨクする。
- ⑤ ユウラン船に乗る。
- ⑥ 説明をオギナウ。
- ⑦ 相手の発言をサカテに取る。
- ⑧ 飼い犬に愛情をソソグ。

名前

受験番号シール



受験番号シールは
枠に合わせて
貼ってください

--

総 得 点

な人間関係。

PL

